

漢詩に親しむ 其三 一 三題噺 漢詩・インタビュー 二 ネット・中国語奨学生

藤木英夫（会員）

協会、福富さんへの味も素っ気もない事務連絡メールに、拙作の漢詩を添付したところ、印刷して談話室に掲示して下さり、それが編集委員の方の目に触れて、ここに紙面を頂く事となった。

さすがにこの時は実感としてさすかと思った。しかし、作詩したい思いは強まるばかり。

退職後、新しい経験が増える中、複数の動機があつて漢詩に親しむ様になった。特に、つい百年前迄多くの日本人が漢詩を作っていた事を知ったのは大きく、自分も漢詩を作りたいという思いがつのり、すぐに作詩を始めた。当初は怖いもの知らずで、夢中になって作り続けたのだが、半年程で壁に突き当たる。

話をしながら言葉覚えてきた。かまうものか、作りたい様になるうと考え直したら、気が楽になり状況は変わった。しかし、片言で話す（駄作を積み上げる）にも、まだ何も頭の中になく、身には「外部の脳」が必要で、私のそれは電子辞書と、電子版漢詩データベースだった。実はこれ等は今の時代だから使えるので、ほんの十年前には入手不能だったろう。この間の、これら電子機器とアプリケーション・ソフトウェアの進歩は目覚ましい。

『唐詩選』等の詩集を読みこなし、暗誦出来るくらいになつてから作詩を始めるべきであり、いきなり絶句や律詩を作り出すのは無謀と言われている。私も

実は、この方法で作詩をくり返す内に自身の脳も鍛えられたし、「外部の脳」との連携も上

手になって来たのではないかと自惚れている。何より嬉しいのは、名作唐詩等を作者に寄り添って鑑賞出来る様になり、以前より深く楽しめるようになった事だ。そして、漢詩を「漢字の詩」として、そのまま鑑賞する事の大切さを知り、同様に作詩も漢字一字一字を味わいながら、言わば画家が絵の具を塗る如く作れる様になって来た。これらは、とにかく沢山作り、沢山読んで（実は一首作るには、その何倍何十倍もの詩をデータベース上で読まざるを得ない）ご利益だ。

協会の中に漢詩を通じた何らかのつながりが生まれるきっかけになればと願っている。

この二年、福島第一原発の後始末について発表して来た。そろそろ中間まとめを善隣誌に投稿してはどうかとの話もあったのだが、今迄の私の活動は私自身の為にはなっていないも、それ以上ではないと感ずる事大で、筆が進まなかった。今回、この文の最後に、私の福島第一原発に関する律詩を載せて、それに代えたい。

福島第一原子力発電所災禍後
為何我不使用冷暖房電気機器
廢炉 勞百姓、日夜 險危中。
郷里 氣汚濁、都城 氣暖烘。
思輕 妨天業、心慢 進人工。
黑靄 蔽星月、偽光 歛小童。

このインターネット上の漢詩のデータベースは簡体字によるものが多く、私が一番世話になっているものも簡体字経由である。協会の前身国際善隣俱樂部に中国語奨学生として、現代中国語を習わせて頂いた事がこんな処まで役立った。恩返しをしたかと思つて入会したのに、いまだに恩を受けるばかりで、複雑な思いがする。出来れば、この記事が同好の方のお目に留り、

（漢詩に親しむ 其二）として、この文を投稿するきっかけとなった伊豆七島航路の漢詩二十余首と、日本語歌詞及び写真を、後日投稿致します）